

「ピンポン外交」と後藤鉀二

鄭 躍慶

はじめに

今から 36 年前、すなわち 1971 年 3 月 28 日から 4 月 7 日まで日本の名古屋で行なわれた第 31 回世界卓球選手権大会（以下、名古屋大会と記す）の中で、一つ歴史に残る事件が起こった。それは有名な「ピンポン外交」である。名古屋を舞台にして中国とアメリカの間に展開された「ピンポン外交」は、中米関係に大きな変化をもたらした、更に中日国交正常化の起爆剤にもなり、世界の歴史に新しいページを開いた。中米の間に民間交流の扉が「ピンポン外交」によって開けられたのである。両国は卓球チームという民間交流を通じて、お互いに友好ムードと信頼関係を築きあった。その後、キッシンジャー大統領補佐官の極秘裡の訪中を経て、アメリカによる台湾海峡封鎖、中国封じ込め、国連加盟阻止、更にベトナム戦争と氷河期にあった中米関係は、卓球の速攻のように急テンポで和解に向け進んだのである。そして 1972 年 2 月には、ニクソン大統領の訪中が実現し、さらに中国は国連加盟を果たした。また、1972 年 9 月、田中角栄首相の訪中によって中日国交回復が実現した。

ところで、「ピンポン外交」は、実は 1960 年代末から 70 年代初めにかけて、ニクソン政権下のアメリカと文革末期の中国とが長年の対立関係を打開しようとした極秘裡の交渉の中での一つの出来事であった。本論で述べるように、ちょうど中米両国が互いに関係改善を求め合う中で、名古屋における世界卓球大会の最高責任者であった後藤鉀二（日本卓球連盟会長、1906—1972）が、中米両国に「ピンポン外交」を演出させる舞台作りをしたのである。もし、後藤鉀二が多方面からの反対を押し切って、中国を招聘するため自ら北京に赴いていなかったら、文化大革命によって、第 29、30 回の世界卓球選手権大会に参加する機会を失っていた中国卓球チームの 6 年ぶりの世界大会への復帰はなかったであろう。「ピンポン外交」の主演である中国チームが名古屋大会に参加していなければ、中米卓球チームの直接交流も生まれるはずもなく、中米国交回復は大分後のことになった筈である。その意味で、後藤鉀二は「ピンポン外交の生みの親」と呼ばれたのである¹⁾。

「ピンポン外交」は民間外交の成功例として大いに評価されるべきである。戦後の中米、中日の関係史が語られる時、ピンポン外交がしばしば話題にのぼる。しかし、残念なことに、日本ではその演出者である後藤鉀二について語られることは極めて少ないようである。これに対して中国での後藤鉀二の評価は大変高い。彼は中米両国間の直接対話のチャンネルを繋げる上で最大の功績を残した「日本の友人」なのである。故周恩来総理をはじめ政界、スポーツ関係の幹部のみならず中国人民は、「飲水不忘掘井人」（水を飲む時、井戸を掘ってくれた人の恩を忘れない）と、「井戸を掘った人」として後藤鉀二を高く讃えている。2002 年は「ピンポン外

交」30周年の記念すべき年であった。子供の時から卓球に縁を持ち、中国卓球ナショナルチームの一員でもあった私は、後藤を軸に「ピンポン外交」の舞台が設定されるに至った過程を明らかにしてみたい。それはまた、国際社会における複雑な政治問題の解決に関し、民間人が果たす役目を考える事例研究としての意味をもつ。そして、これに続き「ピンポン外交」を可能とした後藤の人となりについて論ずることにする。

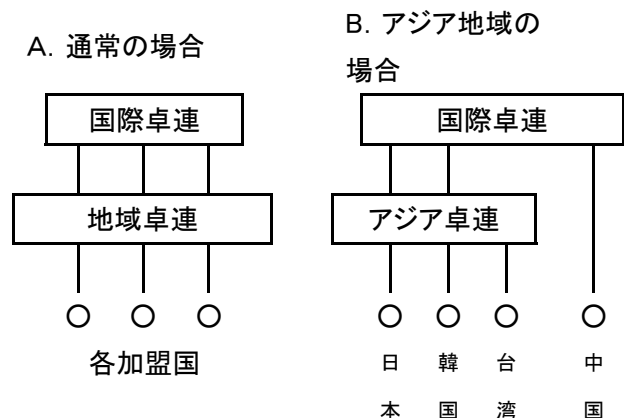
1. 「二つの中国」

1971年の世界卓球大会が名古屋で行なわれると決まってから、名古屋を地元とする後藤は、それが最高の大会となるよう、心に期するところがあった。名古屋大会成功の鍵は中国の参加にあった。

中国チームは文化大革命によって1967年、69年の世界選手権大会に二回続けて参加しなかった。1961年の北京大会で中国チームは卓球王国・日本の5連覇（1954年ロンドン大会から）を阻んだうえに、その後の大会における優勝も含め3連覇を達成していた。男子シングルスで荘則棟も3連覇を達成した。また、中国は、1965年の世界大会で、実に7種目中5種目を制覇した。当時このような成績を残していた中国の卓球は世界最強といいだろう。その意味で中国が参加しなかった2回の大会は、実質的な「世界大会」ではなかった。後藤にとって、名古屋大会を名実とも世界大会にするためには、世界一の實力を持つ中国チームの参加が不可欠であったのである。

しかし、中国卓球チームの参加を実現するには、一つのデリケートで大きな政治問題が存在した。それは中国の方を取るか、台湾の方を取るかという問題であった。当時、中国が加盟した国際卓球連盟（ITTF、以下国際卓連、1927年設立）の憲章では、加盟国でなければ地域卓球連盟にも加盟できないことになっていた。中国は1952年国際卓連に加盟した。他方、1952年にアジア卓球連盟（ATTF）が設立され、中国はそれに加盟した。ところが、翌1953年における台湾の加入により、中国はそれを脱退した。その後、台湾は国際卓球連盟に加盟しようとしたが、その申請はその都度拒否された。こうして、台湾は国際卓球連盟には加盟していないが、アジア卓球連盟の一員であるという事態がその後20年近く続くこととなった。この状態を図示すると右下のようになる。

しかし、このような事態は卓球だけに止まらなかった。1958年秋から、国際スポーツ界において、国際オリンピック委員会をはじめ、陸上競技、水泳など多くの種目別協会からも、中国は「二つの中国」に反対する立場からそれぞれ脱退した。さらに、1970年に至り、加盟していた国際バレーボール連盟が「台湾」を認めたことに抗議して、中国はそれからも脱退した。これに続き、テニス、アーチェリーの組織からも脱退する事態となった。すなわち、1970年当時、国際スポーツ界においては、上の図におけるAの状態よりも



Bが常態となりつつあった。後藤がアジア卓球連盟の会長になったのは、こうした時であった。それは、ちょうど中国卓球チームが国際舞台から姿を消した 1967 年 8 月にシンガポールで行なわれた第 8 回アジア卓球選手権大会後のことである。

他方、1966 年の夏ごろから文化大革命が活発化したために、中国は日本や諸外国における活動や国際的な交流が全くなくなっていた。この国際環境で、後藤が会長を務めるアジア卓球連盟に台湾が加盟していたことにより、後藤自身も台湾卓球界との交流に傾斜していった。こうした状況の下、1968 年 3 月に名古屋で開催されたアジア卓球連盟首脳会議で、台湾の国際卓連盟への加盟推薦が了承された。結果的に台湾の加盟は実現しなかったが、このことに対し、中国の大きな反発を招いた。同年の 4 月に北京発の新華社電は、アジア卓連のこの措置に関して次のように激しく非難した。

「後藤会長らは最近、名古屋でのアジア卓連総会で国際卓連への台湾加盟を推薦した。アジア卓連は米帝国主義とその手先の佐藤政府にそそのかされて国際スポーツ界に「二つの中国」を作り出す陰謀を進めている。」²⁾

しかもその後、1970 年 4 月にはその後「ピンポン外交」の舞台となった愛知県体育館で、第 10 回アジア卓球選手権大会が開かれ、台湾も招かれた。

更に加えて当時の日本政府は「二つの中国」、「政経分離」などを唱えつつ、台湾の国民党政府を中国の正統政府として承認しており、それと国交を持っていたが、中国との国交はなかった。その上、当時の文化大革命の影響で、今までの中日間のスポーツ交流が停止を余儀なくされたので、後藤鉀二は個人的に台湾の卓球界と交流関係を深めていった。このような情勢のなかで、第 31 回世界卓球選手権大会＝名古屋大会の具体的準備は進められていった。後藤は、中国の参加を実現して名古屋大会を正真正銘の世界卓球大会にしたい一心で、中国を招聘することに決心したのである³⁾。しかし、他方で彼は、先の 2 回にわたる世界大会に欠場した中国を名古屋に迎えるために、「台湾問題」を正しく処理する、言うならば「二つの中国」に対する決別を鮮明に宣言しなければならないという、政治課題を自ら抱えることになる。

1970 年夏から、後藤鉀二は、日本中国文化交流協会と協議し、中国を招聘するための準備を進めたが、何よりも日中両国間に大きく横たわっている「台湾問題」という最大の難題をどのように解決するのか。従来の「スポーツと政治は別である」という考え方は、もはや何の問題の解決にならないようであった。後藤に求められることは、大きな視野と大胆な判断、そして果敢な実行であった。

厚くて複雑な政治の壁を前にして、名古屋大会の組織委員会会長を勤めていた後藤は苦悩した。日本卓球協会の幹部である四十栄伊久治事務局長や日中文化交流協会の幹部・西園寺公一常任理事、村岡久平事務局次長とも度重なる協議と情勢分析をした。これは次の新聞記者のインタビューに答えた後藤の話でも明らかである。

「私としては中国の参加を希望している。中国へ行ったときも、そのすばらしい活力に感心した。卓球を離れても、日中国交の復活は必要だと思っている。今後、西園寺公一氏や日中友好協会の人たちにも会って、中国参加のために努力したい。世界大会さえ立派にやれば、私はアジア卓連に限らず、日卓協の会長も、いつやめてもいい。」⁴⁾

すなわち、「世界大会さえ立派にやれば」という言葉は後藤の本音であった。それで、1970

年末に後藤鉦二はついに決断を下し、日本中国文化交流協会に「国際卓連の憲章を遵守」という主旨の書簡を送った。それは、アジア卓連から台湾を除名することを意味し、中国チームの名古屋大会参加の障害を取り除くことであった。この間の事情は西園寺公一の追憶からも読み取れる。

「後藤さんにははじめて会ったのは、私が北京に在住して「民間大使」ならざる民間小使をつとめているときで、卓球の団長として訪中したのである。(中略) 1970年の夏、私が13年半も住み慣れた北京から帰国したとき持ち帰った重要案件の一つは、翌年に名古屋で開催される世界卓球選手権大会に中国が参加するかどうかという問題だった。条件さえととのえば、中国はぜひ参加したいのである。条件というのはもちろん台湾だ。いかなることがあっても、一国を僭称する台湾の代表とは同席しないのが中国の一貫した原則なのだ。後藤さんとこの点について話し合いを重ねたが、なかなか色よい返事はなかった。

暮れもおしつまったある日電話があった。今日は難しい話はさておいて、一杯飲もうじゃないかというのだ。連れていかれたのは名の知れた仰々しい酒店ではなく、ちんまりしたお茶屋だった。後藤さんは太鼓を取り寄せて楽しそうに打った。思いのほかのばちさばきで、スポーツばかりではなくこういう方もなかなか達者なのに驚いた。飲むほど酔うほどに後藤さんは明るく大声で語り、大声で笑った。そのうちに、なんとなくしんみりした調子で、「北京のあんたの家で魚拓をみせてもらったナ。大きな魚だったナ。中国なあ、中国が来んでは世界大会にはならんじゃないか。やろう。な。」といった⁵⁾。

西園寺公一の言う「なかなか色よい返事はなかった」頃、後藤は苦悩していたにちがいない。「中国が来んでは世界大会にはならんじゃないか。やろう。」と決心した後藤鉦二は、アジア卓連組織を国際卓連の憲章にしたがって、改革すべく全力を尽くすと約束した。

これに関して、『毎日新聞』(1970年12月31日付)は「台湾除き中国招く・名古屋で開く世界卓球後藤協会長が決意」と題し、次のように報道した。

来年3月18日、名古屋で開く世界卓球選手権に中国を招く問題について、アジア卓連加盟の台湾への配慮からこれまでに明確な態度表明を避けてきた日本卓球協会の後藤鉦二会長は30日「国際卓連の規則に従ってアジア卓連から台湾を除き、中国の世界選手権参加を推進する」ことを決意、同協会・四十栄伊久治事務局長にその準備を進めるよう指示した。この結果、同協会は新春早々にも日中文化交流協会・中島健蔵理事長らに会って中国参加への協力を求めることになり、実力ナンバーワンの中国が4年ぶり(第29、30回欠場)に世界選手権に登場する道が開かれる。

これに続けて「世界選手権を名実ともに世界選手権とするために中国に出場してもらわなくてはならない。国際卓連の規則に従い台湾を除外するよう主張する」という後藤会長の談話が報ぜられた。

この後藤の決断を受けて日本卓球協会が「日中関係政治三原則」(中国を敵視する政策をとらない、「二つの中国」をつくりだす陰謀に加わらない、日中国交正常化を妨げない)に基づいて、日中卓球界の友好交流を図るという後藤の方針を確認した。いわゆる「日中関係政治三原則」とは、周恩来総理が1958年7月に日本社会党代表団と会見したときに提起したものであり、国交正常化前において、中国側が提示した日中関係打開の基本条件であった。

国交のある台湾を捨て、国交のない中国のチームを名古屋大会に参加させるということは、この問題がスポーツの分野を離れ、政治レベルへと転化することを意味した。ちなみに、日本の文部省はすぐさまクレームをつけた。共産主義国家の参加に反対する右翼からの脅かし、日本国内の種々の思想団体からの強い反対もあった。特に後藤鉀二が自ら参加交渉のため訪中準備を進めると報道されてから、嫌がらせの電話が昼夜を問わず、学校や自宅にかかってきたり、自宅の庭には投石までされたりして、幾多の迫害を受けた。しかし、後藤は卓球のために名古屋大会を成功させようと、その圧力に屈しなかった。

ではなぜ、彼は「二つの中国」から「一つの中国」へと転じ、後戻りしなかったのか。ひとつは後藤の地元名古屋への愛着が、大会成功のため、後藤をして後戻りを拒んだのであろう。しかし彼は日本卓球連盟においてワンマン会長であり、彼に対する批判も少なくなかった。特に、名古屋大会のために組織されたチームのコーチ陣からその姿勢をめぐり彼は総すかんを食らっており、大会開催を前に彼はその指導力が問われ、微妙な立場にあった⁶⁾。後藤が日本卓球連盟において指導力を回復するには、中国が参加する名古屋大会を実現することでもあった。

2. 紆余曲折の北京交渉

1971年1月24日朝、中国人民対外友好協会からの招聘状を受けた。後藤は、秘書の小田悠祐を連れ東京に向かった。脅迫されていたので、後藤はハンチングに眼鏡、マスクで変装した。羽田空港で森武日本卓球協会理事、村岡久平日中文化交流協会事務局長と合流して一緒に東京から香港経由で、北京へ向かった。

この時点で名古屋大会の開幕の日の3月28日までにはまだ2ヶ月あったが、参加申込期限の2月5日までは、わずか10日しか残っていない。しかも中国はまだ申し込んでいなかった。その中国チームを呼ぶために後藤鉀二は訪中の途についてのである。1月25日、北京空港で後藤ら一行は中国人民対外友好協会の責任者・呉曉達と中国卓球協会主席代理の宋中に迎えられた。この日に始まった後藤鉀二の「北京日記」⁷⁾には、この日の様子を次のように記している。

「昨夜羽田から香港へ。八時半、香港（九龍鉄道）出発羅湖九時五十分着。

国境を越す。荷物、パスポートなどの手続き簡略。当局の指示十分ありと思考し感謝する。中華全国体育総会を代表して北京から洪林氏らが出迎える。深圳から乗車。（なかなか上等な車）

昨日の疲れのせいか、広州に到着するまで眠る。あわてて下車。直ちに飛行場へ。この飛行機は私たち（四人）のため、三時間半遅らせて、出発するとのこと。（非常に好意に満ちた扱いである）。夜九時三十分、北京空港に到着する。十一時半ごろ、北京ホテルにはいる。部屋は各自別室で十二分の配慮あり」

その夜、ホテルで後藤鉀二は中国訪問に際し準備してきた日本語の「日中両国卓球界の友好交流に関する会談紀要草案」（以下「会談紀要草案」とする）を宋中に手渡した。この「会談紀要草案」は、すぐさま中国語に翻訳された。中国側の資料によると、概ねその要点は次の通りである⁸⁾。

（1）第31回世界卓球選手権大会に中国チームを招請する。

- (2) 中日選手間の交流を密にし、中日関係3原則を遵守する。
- (3) 第31回世界卓球選手権大会後、中国卓球チームは日本を訪問する。その後、日本卓球チームが中国を訪問する。
- (4) 第31回世界卓球選手権大会に、台湾が派遣するチームを参加させない。そして不法に席を占めている台湾卓球協会を連盟から除名する。

さて、第1回の会談に、宋中のほかに中日友好協会副秘書長・王晓雲と鄒伯賢・中国卓球協会理事長ら6名が中国側代表として参加した。

後藤に随行した森武の「中国訪問記録」と題するメモ⁹⁾によれば、1月27日に始まった、この会談の主要部分は次の通りである。

北京飯店会議室に正式会談がはじまる。

出席者

中国側 宋中・王晓雲・鄒伯賢・李福德・周斌・顔万榮・王家棟

日本側 後藤鉦二・村岡久平・森武・小田悠祐

正式会談の要旨

宋中

「後藤鉦二先生一行の訪中を心から歓迎します。先生の勇氣ある行動に敬意を表するとともに両国間に横たわる問題を積極的に解決していきたい」

後藤

「貴国にお招きいただき感謝する。空港でも表明したとおり、中国は一つであり、台湾は中国の一領土である。現在のアジア卓連は ITTF 規約に違反していることは事実であり、アジアの卓球界から台湾を除名することにやぶさかでない。すでに我々の基本的考えは決まっている。」

「1966年、20名の役員・選手を率い、4週間にわたり貴国を訪問した。7億人民と日本の26倍の国土と近代化に励む新中国をこの目で見、耳で聞き、肌で感じた。なぜ、日本政府が中国に目を向けないのかという疑問も感じた。同じアジアに位置する両国が助け合うことはアジアの団結、ひいては国際平和に繋がることは私自身も十二分に理解している。しかし中国国内で勃発した文化大革命は両国間の交流を阻む結果となった。これは日中両国間の卓球人にとって寂しい出来事であり、さらには両国の交流に問題も残した。

さて、台湾問題である。これには私にも責任の一端がある。ITTF 規約を十二分に理解せず、台湾の加盟を容認していた。だが台湾の加盟は14年前の話であり、当時はインドのランガ・ラマヌジャンが会長をしていた。私はその体制をそのまま受け継いだ。当然のこと、1968年の ATTA 臨時総会、1970年のアジア卓球選手権大会(名古屋)に ATTA 会員として台湾を招いたが、その後 ITTF 専務理事の A・K・ビント氏より ATTA における台湾のメンバーシップについて勧告を受け誤りに気づいた。以上が台湾問題に対する経緯である。

しかし、日本の政府は台湾を中華民国として承認している。このような状況のなか、卓球協会だけが独自の路線を歩むことは困難なことであった。国庫の補助金を受け、会の運営を図る卓球協会にとって、国の方針に真っ向から逆行することには問題が多すぎた。私自

身 ATTA・ITTF の関係を十二分に把握していなかった責任もあるが日本国内の事情も推察いただき心情を察していただきたい。

今後は、この問題を前向きに解決していきたい。両国が腹を割り、アジア卓球界のことを考えることは誠に意義がある。私は今回、この問題を十二分に話し合うことと、第31回世界大会（名古屋大会）に貴国の参加を招聘するために訪れた。私も日本に帰れば本業が待っている。これも国庫の補助をいただいているものです。こうした関係上、私の周りにはいろいろな面倒なことが残りますが私の意志は変わりません」

王晓雲

「後藤先生の意志ははっきりし、また固い意志に対し敬意を表します。生命の危険も恐れず、わが国を訪問され世界大会の参加要請をいただき感謝にたえません。しかし、両国間に横たわる政治的問題は取り除かねばなりません。これが日中友好の基本であり三原則を守ることによって日中間は正常化されるものであります。私達も交流がよりよく進むことを願いたい。」

後藤

「私自身もアジアの卓球界を整理したいと思っている。第一の考えは ITTF の勧告どおり ATTA より台湾を除名することである。第二には台湾除名が不可能な場合は新しい組織を作るかである。」

王晓雲

「日本の国情は理解できる。日本政府は台湾を容認し、「二つの中国論」に加担している。しかし、我々は政治三原則の上に立っている。この問題を通らずには解決できない。……」

後藤

「私が会長の間は決して台湾を認めない。台湾は中国の一部であり、この見解はハッキリしている。今後日中両国の友好の絆を深めることは我々スポーツ人として認識している。」

宋中

「後藤先生の考えは十分に理解できた。我々も後藤先生に対し協力を惜しまない。双方が努力し両国の正常化を考えることは有意義である。この話し合いを双方でまとめ簡明瞭な文章として交わしたらどうか。」

後藤

「同意した。日本の国情も考え双方が有益な形で文書にまとめたら良い。後は事務レベルで話し合ってもらいたい。村岡・森・小田が参加するので十二分に話し合ってもらいたい。」

以上が森メモによる第一回目の会談内容である。当日について後藤の「北京日記」には次のように記されている。

（前略）九時四十分、両国卓球協会の正式会議あり。参加者は中国側、宋中（会長）、王晓雲中日友好協会副秘書長、鄒伯賢卓球協会理事長ら。

私の訪中の目的を話す。中国は一つだ。台湾は中国で解決すべきだ。これを機会に日中の友好を高めよう。もちろん卓球を通じて。それが将来の日中国交正常化の万分の一のかけはしになれば幸甚である。両者合意の表現はやわらかにしてくれと要望する。宋中会長が私の立場を理解してくれ、政治会談ではないので、あくまで卓球協会として話をまとめよ

うということであった。¹⁰⁾

日記からみると、会談が順調だったように見える。しかし、実際はそうではなかった。当時はまだ文化大革命が中国全土にもたらした極左思想は各方面に根強く残っていた。その影響がこの会談にも及んだ。翌日 28 日夕食後、合意文書の内容を詰める事務レベル協議に入った。政治三原則については、すでに前日の会談で合意したが、表現方法において問題が生じた。台湾を除外することを明記するように中国側が強く主張したのである。後藤は次のように述べ、これを拒否した。

我々はスポーツの話し合いに来ている。確かに両国間には政治的問題も残されているが、互いの立場も尊重し合い話し合いを進めたい。我が国は貴国の国情を考え「対日政治三原則」を呑んだ。これは我々のできる精一杯のところである。台湾問題については貴国が日本の国情を理解してくれなければ話は進まない。ITTF ルールに照らして ATTA 問題を処理するという柔らかな表現にと中国側に要望した。¹¹⁾

その日の「北京日記」には後藤次のように記した。

(前略)、北京の今は寒い。

北京の人々は親切だ。そして人なつこい。

ともに日本軍の暴虐を忘れたように、

寛大な中国人に今こそつくすべきだ。

北京の街は人でいっぱい。¹²⁾

この「北京日記」の記述からは話し合いの難しさを全く伺うことはできない。この時難航していた会談を好意に避けるかのように、日記には愚痴をひとつも書かれていなかった。かえって、中国人の親切さに感動させられ、「寛大な中国人に今こそつくすべきだ」との心情を表わした。

会談は 3 日目に入って、行詰り状態になった。後藤は病気と称して北京ホテルの自室に閉じ籠もり、会談を拒否した。

その日の午後一時、会談の進展を報告した書類で、後藤との会談に「台湾」という厄介な問題が持ち上がっていることを知った周恩来総理は、中国側の会談メンバーを國務院に集めた。周恩来は、

「後藤鉀二先生のような友好人士は支持しなければならない。彼の立場になりかわって問題を考える必要がある。彼は文革後、初めて中国に来て、しかも六十五歳の人だ。その人がアジア卓球連盟整頓の動議を出すと言っている。なかなかできることではない¹³⁾」

と述べ、次のように指示を出した。

「実質を見るべきだ。形式的な論争はやめたまえ。会談の相手は日本卓球協会の会長ではないか。この二月に来ることになっている藤山愛一郎元外相は、日中国交回復促進議員連盟の会長だから、当然、われわれは台湾問題を前面に押し出さなければならない。しかし、後藤先生にはその必要はない。彼に難題を吹っかけるな。中日関係政治三原則は日本側の原案通り第二条でよろしい。第一条にする必要はない¹⁴⁾」

周恩来の指示を受け、会談の行詰り状態が打破されることになった。午後四時に中日の会談は再開され、一時間あまり当初の日本案通りで話が纏まった。夜、後藤鉀二一行は人民大会堂

に招かれて、周恩来総理と会見した。

その日の「北京日記」には、

「午後三時ごろ、急に電話あり。中国側が会談したいとのこと。会談の内容は非常に先方の要求が強く、きびしさを感じたが、私の率直な話を了承されて、結局当方の提出したとおりとなる。

夜、休んでいると、周恩来総理が会うから用意して待つようにとの連絡あり。一同つれだつて接見場所の人民大会堂に行く。人民大会堂とは日本の国会議事堂。

来国歓迎のことばが総理からある。私が招待のお礼を申し上げる。アジア卓連についての質問、対処する方策、それへの忠告などあり。世界選手権に参加するが、現在の日本の強さ、その他国の強さなどの話、また卓球技術の変わり方、日中卓球交流についての質問あり。当方ジュニア・チームを船で訪問させたい旨申し述べると大賛成をしてくれた。会談約一時間半。¹⁵⁾

周恩来総理との会見は夜の 11 時まで 1 時間半にわたった。

1971 年 2 月 1 日、中日双方の会談紀要が調印された。これで、中国卓球チームを確実に日本の名古屋大会に招請することに後藤は成功したのである。第 31 回世界卓球選手権大会を名実ともに「世界大会」にすることができたのだ。当日の「北京日記」は次のように書かれた。

村岡、東京へきょうの双方の合同協議の文書を送り、六時発表する。午後四時ごろ、最後の会議で双方の文書を取り交わし、署名、押印する。¹⁶⁾

なお、「会談紀要」¹⁷⁾の骨子は次のようである。

- 一、日本卓球協会は国際卓球連盟の規約を遵守し、国際卓球スポーツの発展をはかり、特に国際卓球連盟の規約に基づき、アジア卓球連盟を整頓する。
- 二、日本卓球協会は中日関係政治三原則に基づき、中日両国卓球界の友好交流を発展させる意向を表明した。中国卓球協会は、これに敬意と支持の意を表明した。
- 三、日本卓球協会は、上の原則にのっとり、本年 3 月 28 日から 4 月 7 日にかけて日本名古屋で開催される第 31 回世界卓球選手権大会に中国チームを招請する。中国卓球協会は招請を受け入れ、チームを派遣する。
- 四、第 31 回世界卓球選手権大会の後、中国卓球チームは引き続き日本で訪問を延長し、中日友好試合を行なう。
- 五、中国卓球協会と中国人民対外友好協会は日本中国文化交流協会、日本卓球協会並びその他の友好人士が中日卓球界と両国人民間の友好団結を発展させ、増進させるためになされた努力に感謝する。

ところで、この「会談紀要」第一条にある「国際卓球連盟の規約に基づきアジア卓球連盟を整頓する」とは、いかなることを意味するのか。1968 年に国際卓球連盟はその加盟国でないものは地域卓連にも加盟できないという規約を決めた。それで、国際卓球連盟のメンバーではない台湾はアジア卓連に加盟する資格もない。したがって、アジア卓球連盟を整頓するというのはすなわち台湾を追放するという意味である。

さて、後藤はその後、2 月 7 日にシンガポールで行なわれる予定のアジア卓球連盟臨時総会

に出席し、「会談紀要」の第一条に基づき、国際卓球連盟の規約に従い「台湾」を除名することを提案したが、韓国、マレーシアなど多数を占める台湾支持国の反対に遭った。後藤は用意していた辞表を出した。

シンガポールから帰国した後藤は「日中卓球界の新たな発展」¹⁸⁾ という文章を発表した。当時「台湾」を除名し、中国を迎えるために北京へ飛んでいった後藤の信念と抱負を伺い知ることができるので、以下に全文を引用する。

七億五千万の人口を有し、日本の二十六倍の豊富な国土をもつ隣国中華人民共和国との友好は絶対に必要なことであり、こんにちの不正常な状態を一日も早く克服して国交の正常化を図ることは、私たちにとって眼前の急務となっている。私はこのことの重要性を日頃から感じていた。

私は重大な決意をもって今回の訪中に臨んだ。名古屋で第31回世界卓球選手権大会開催が決定されて以来、中国問題をどうするかということが私の頭を去らなかつた。両国には国交が回復していないこと、「台湾」に関する問題、最近の国際卓球界の問題など、複雑で困難な問題が山積していた。しかし私は日本卓球協会の責任者として、世界卓球選手権大会を開催する当事者として、安穩と傍観してはられない立場にあった。一方、国内にも種々の問題があった。

私自身も考え悩み対策をねった。日本卓球協会の幹部と話し合ったり、わたしの友人や関係者と相談したりもした。日中文化交流協会と昨年夏以来何回となく協議を行ない、その結果、中国を訪問して、率直に誠意をもって話し合うことが、問題を進展させる大きなカギであるという考えに達し、同協会を通じて訪中の決意をお伝えした。北京では中国卓協の宋中、対外友協の呉曉達両先生はじめ責任あるかたがたと話し合いを行なった。きわめて友好的かつ率直な雰囲気の中で会談は進められた。中国の友人は始終、私の立場と意見をよく理解し配慮してくださった。私は心から感激している。私たちは周総理、郭沫若先生と会見の栄に浴した。一時間半、ときのたつのも忘れるくらいの充実した会見であった。周総理は今回の私たちの訪中を歓迎し、両国卓球界の友好交流を発展させることの重要性を述べ、シンガポールにおもむく私を心から激励し、支持と支援をおくってくださった。また、日中両国が真に協力してアジアの卓球界を正しくする問題についても熱心に語られた。私は日中友好を深め、両国が団結してアジアの卓球界を整頓することの重要性について、いっそう認識を新たにしたい次第である。

政治三原則についてとやかく言う人があるが、日本と中国との友好をまじめに考えるならば、このことはごくあたりまえのことである。政治三原則は両国の友好交流を促進する基礎であると私は確信している。

私は「会談紀要」の精神を正しく受けとめ実行してゆきたい。障害や困難を乗り越えて進めることがまず大切である。日中両国がほんとうに団結すれば、アジアの平和を作り出すことができるということを、私は卓球の面から努力し実現させてゆきたいと考えている。

この文章には、日中友好の重要性に対する認識と卓球を通じてそれを深めてゆく後藤の決意が述べられている。日本政府よりもいち早く日中関係政治三原則が両国の友好交流を促進する基礎だと認識した後藤鉦二は責任感の強い行動派であり、日本の政界においては「未公認」で

あったボールでもって、名古屋の世界選手権に中国チームの参加という「ポイント」を勝ち取った。それが、日中友好のためにも大きな一歩を進め、更に名古屋大会において中国とアメリカを急接近させるチャンスを作り出し、「ピンポン外交」を生み出すことになった。

3. 信念の人・後藤鉦二

かつて世界大会にチームドクターとして後藤に同行した蜂谷弘道は、「世界の平和、これをもたらしたものは一に先生の偉大な足跡であり、ノーベル平和賞は先生にこそ贈られるのが当然であると私は考えます。」¹⁹⁾と評した。ノーベル平和賞はともかく、後藤鉦二は中、米、日の人民にとって、いつまでも忘れられない名前となっている。そのような後藤鉦二はどのような人間であろうか。

後藤鉦二は1906（明治39）年11月に東京で生まれた。父喬三郎が名古屋中区岩井町に名古屋電気学講習所を開設したので、幼少から名古屋で育つ。中学校のころは剣道に打ち込んだ。1925（大正14）年、父喬三郎病没、わずか19歳で名古屋電気学校を継承し校主となる。1926（大正15）に浜松高等工業学校電気科（現静岡大学工学部）に入学、同校の剣道部に入部するとともに、卓球を始めた。24歳の若さで名古屋卓球協会の理事、30歳で愛知県卓球協会の理事長になった。そして自らが学長を務めた名古屋電気学園と愛知工業大学からは優れた卓球選手が輩出し、日本卓球揺籃の地という誉れされた、その結果、名電高校や愛知工業大学は卓球をはじめのさまざまなスポーツで輝かしい実績をあげるに至った。第30回世界卓球選手権大会に見事男子シングルスで優勝した長谷川信彦はその一人である。その後は日本卓球協会の会長、アジア卓球協会の会長、国際卓球連盟会長代理などを歴任し、彼の日本卓球界ないし世界卓球界に寄与するところが大きいことは広く人々の認めるところとなった。後藤はスポーツを大いに奨励した。

後藤は何よりも、信念の人であった。後藤の「信念」は政治的なものではなく、スポーツへの愛着から来たものだと考えられる。早くからもスポーツやスポーツ教育に情熱を燃やすようになった彼は、名古屋で第31回世界選手権大会開催が決定されてから、世界最強が出場して、世界一を決めるのが世界選手権大会だと主張したのである。後藤は「卓球人なら世界一強い中国と戦いたいのは、だれもの願いだ」²⁰⁾と述べた。そのような世界一の中国チームをいれない世界選手権は有り得ないという信念のもとで、彼は中国に招待状を送ったのである。こうした信念こそが後藤鉦二に勇気を与え、自分にとって嫌な厚い政治の壁に対して果敢に挑戦させ、彼は見事にそれを乗り越えた。当時の日本体育協会にしても、文部省にしてもスポーツの中立性や非政治性を主張して、政治問題と向き合う意志もなかったようであった。これに対し、後藤鉦二日本卓球協会会長は、内外からの批判を浴びながらも、難問に挑戦するスポーツ人の不屈の精神と勇気をもってこの問題に向き合った。

信念の人は決まって責任感の強い人である。第二に後藤は責任感の強い人であった。名古屋大会を成功させるために、そして世界の卓球レベルを高めるために、世界一の実力者としての中国チームの参加が是非必要であった。それで、文化大革命のため中国卓球界との交流が絶たれた時期に、国内外からの強い反対を押し切り痛む足をひきずりつつ、中国チームの参加を要請するため、名古屋から東京・香港・深圳・広州・北京へと何回も汽車と飛行機を乗り換え

国を訪問した。これは固い信念と強い責任感があってこそ初めて成し遂げられる大仕事だ。

第三に、後藤は中国への友好的な気持の持ち主であった。彼は 1937 年 8 月から 1940 年 8 月までの 3 年間に第四通信隊の輜重伍長として中国大陸に渡り、日本軍国主義者による侵略戦争が中国人民にもたらした苦難を目のあたりにしてきた。彼自身も、「聖戦」だといいつつながら日本人が実際にやっている残虐行為に、非常に暗い気持ちでいたようであった。あれは日本が侵略した戦争だ²¹⁾と後藤は考えていた。こうした後藤だから、戦後再び中国の土を踏んだ時に中国人から受けた親切さにより一層心を打たれたのではないだろうか。

すでに述べたように後藤はその「北京日記」に「北京の人々は親切だ。そして人なつこい。昔の日本軍の暴虐を忘れたように、寛大な中国人に今こそつくすべきだ。」と記した。

また新聞記者のインタビューに対し、次のように答えたこともある。

「個人的には早く国交を回復してほしい。卓球交流が国交正常化のかけ橋として、万分の一のお役にたてばと思っている。中国は人口、国土、資源などですぐれているが、平和産業の技術が遅れている。それで日本が技術を提供して、日中が栄えれば、アジアの安定にも役立つと思う。」²²⁾

今から見て 30 年以上も前の後藤の言葉はまさに今日の中日関係の方向性を示している。政治家でもないのに彼の予知能力、判断力の鋭さにはつくづく感心させられる。この先見性によって、彼は卓球を通じて中日の友好交流を促す先駆者となった。

第四は世界平和への熱望である。戦争を経験した後藤の平和への熱望は大きなものである。元独立野戦電信第十中隊の伊藤清次ら 7 人は「後藤分隊長殿」と題し、次のように後藤を追想する。「後藤分隊長は日支事変に対しては最初から絶対の否定論者であって、下士官、兵、将校に対しても、私的に話し合うときには必ず自分の意見として、盧溝橋事件は現地部隊長が勝手に起こした謀略であって、軍の上層幹部の榮譽栄達のために我々国民が犠牲になっている。とにかく日本が一番近い中国の国民と血を流し合い殺し合って何の得がある。こんな戦争は一日も早く講和しなければならない。自分には世界の平和のためにやらなければならない仕事があるので絶対に生きて帰るのだと語るのを常としておられた。」²³⁾

まだ戦争の最中、中国の戦場にあった後藤の脳裏を去来したものは常に平和への熱望である。またこの追想文集には、彼が 1938 年 12 月から一年間以上駐留した山西省で、すゞ子夫人から卓球用具を取り寄せ、現地の中国人をまじえての卓球大会を行なったことも書かれている。

宿舎の庭に卓球台をつくり、兵の余暇時間を利用して、卓球の指導と体力士気の高揚に努力された。(中略) また、現地の中国人のなかにも日本兵にまじって卓球に手をだす者がしだいに数を増してきた。分隊長はこれら中国の人々にも自から手を取って指導を行ない、後には日本兵を負かすほどの者もでた。9 月 12 日は部隊が太沽港に上陸した記念日であるため、現地人をまじえての卓球大会が計画され、部隊経理よりたくさんの景品をだして、日中親善卓球大会が盛大に行なわれたことも楽しい思い出である。²⁴⁾

あの不幸な時代において、後藤鉦二らしい卓球を通じての微笑ましい歴史の一齣である。

ところで、後藤は戦争の被害者でもあった。すなわち、1945 年 3 月の空襲で 1 歳半の長男邦昌を失った。この時のことを彼は、名古屋大会の直前に、『毎日新聞』の特集記事に文章を寄せ、次のように述べている。

忘れもしない。12日の大空襲の夜。ジフテリアで名大病院伝染病棟に入院していた邦昌は、看護婦らに抱かれて鶴舞公園に逃げた。しかし、猛火の外周の空気は急に冷えたために病状悪化、14日幼い命を断った。火葬場の満員をいいことに棺を抱いて私は寝ていた。骨にするにしのびなかったのです。18日に骨にした夜の空襲でした。火炎をのがれて池下へ来たとき、もう夜は明けかけていた。いま、私は平和への祈りを込めて世界卓球大会の成功を祈っている。²⁵⁾

この文章から後藤なりに世界平和に貢献したいとする彼の切ない気持ちが十分に読み取れよう。後藤なりの世界平和への貢献とは、スポーツを通じて真の民間外交での大使の役割であった。

さて、後藤は今までの苦勞がたたったのか、名古屋大会の翌年の1972年1月22日、心筋梗塞と解離性大動脈瘤のため急逝した。彼が亡くなった日、『朝日新聞』夕刊は「世界卓球に執念・豪快な笑い今はなし」と題し、次のような記事を掲げ、「卓球の鬼・後藤鉀二日本卓球協会会長」の死を悼んだ。

(前略) 卓球大会のすべてが終わった時、後藤さんは一人、控室にいた。「やっと、私の仕事は終わった。それにしても驚いたよ。」そういつて、渋い茶をすすった。ガンコおやじを驚かせたのは、一番小さく、一番軽く、一番安いピンポン球が、ニクソンさんと毛さんを近づけた米中外交のきっかけをつくったことだった。

「いやあ、ハプニングだったんだ。ワシは知らなかった。あれは、政治卓球でなく、スポーツの交流であったはず。それが、またたく間に政治の舞台になってしまったんだよ。驚いたね。まったく。」

しかし、後藤さんは、「スポーツの裏に潜む政治の動き」を十分に読み取っていたのではないか。中国がカンボジアとの対戦を拒否した時、後藤さんは腕を組んでうなづいた。意外という顔ではない。来るべきものが来たという感じだった。

しかし、米中との「雪解け」のときは、「えっ、ほんとか」と立ち上がったほどだった。この時から後藤さんは忙しくなった。中国側から、米国側から、「政治」の話が相次いで持ちかけられた。そのつど、後藤さんはツエをついて動き回る。試合を、おちおち見られない日が続いた。

六十歳を過ぎた後藤さんは、はたからみてもしんどいようだった。白髪も、めっきりふえた感じだったが、その顔は意外につやつやだった。「ワシが無理に中国チームを呼んできたことが、日中のかけ橋になったばかりか、米国との『政治の橋』もできた。考えてみると政治って、こんなもんかもしれんよ」後藤さんは卓球大会が終わった日、ふとこんなことをいった。²⁶⁾

ともあれ名古屋で米中間に「ピンポン外交」が展開される中、後藤もまたその渦中に身を置いた。小さい卓球が大きな効果を収めたことで、「政治ってこんなもんかもしれない」と彼は悟った。後藤は「ピンポン外交」の橋渡し役として、中国人民の最も親密な日本友人になった。名古屋大会終了後の5月にアジア・アフリカ友好招待卓球大会準備委員会出席のため、今度後藤は家族ともども北京に招待された。この時の事について、彼は『名古屋タイムズ』(1971年7月24日付)紙上で記者と次のような対談をしている。

記者：早速ですが、例のニクソン声明をどう受け取られたのですか。ルーマニのチャウシェスク国会評議会議長などが「根まわし役」を演じ、キッシンジャー米大統領補佐官が「煮つけ役」を行なった、というのが大方の見方ですが、例のピンポン外交も無視することはできないと思いますが。

後藤：政治のことはよくわかりませんが、今度、女房ともども招待され、大歓迎されたところを見ると、名古屋での世界卓球選手権の成功を大きく評価していることは間違いないと思います。

記者：周恩来首相とも単独で、お会いになったそうですね。

後藤：ええ、私たち一家を特別引見してくれました。これは異例中の異例ということです。とにかく予定になかったことでした。スポーツにおけるフェアプレーの精神とか、さしさわりのない話が多かったのですが、日本の「ざるそば」が食べたいなどともいっていました。

（中略）とにかく私たちを特別に引見したあとで、アジア・アフリカの代表国を集めて引見しました。そこでもいろんなスポーツの話などが中心となったが、小さな国の代表にも言葉をかけて、周首相の微笑外交への熱意の一端を見せつけられた思いがしましたね。

記者：郭沫若氏ともお会いになったようですね。

後藤：これも予定外でした。

とにかく彼は日本については今でもくわしいし、理解を寄せているようですね。

記者：奥さんは、各地をまわられて、中国国民の自力ですべての面を推し進めているその「たくましさ」に驚いておられたようですがそれにも増して、関係者の盛大な歓迎に感激しておられたとか。

後藤：その通りです。中国一流の佐藤政府は相手にしないけれども、日本人民は我々と友達ということからも来ているでしょうね。それにしても徹底したものでウチの家内は喜んでしまったわけです。まるで皇后陛下にでもなったような気分だったといっていたほどですよ。

記者：それはやはり、名古屋大会の成功を恩に着ているということでしょうね。

後藤：それは非常に感謝しておりますね。だから卓球を通じては日本には非常な親近感を持ち、見直したと僕は感じてきましたよ。

記者との一問一答から、後藤が民間人として卓球を通しての中国との深い交流ぶりを見て取れると思う。かつての日本留学生であった周恩来と郭沫若との親交も深められていた。この人と人との付き合いはお互いの信頼関係をしっかりと築きあげ、そして中日の友好を深めることに貢献したのである。

さて、後藤が亡くなって4ヶ月後に後藤を発起人とするアジア卓球連合（ATTU）結成総会が北京で行なわれた。その会長には、後藤の長女和子の夫である後藤淳（現名古屋電気学園理事長）が就任した。この時、すゞ子未亡人及び後藤淳の家族も周恩来総理に招待された。5月7日の夜、彼らはアジア16カ国の国や地域からの代表とともに人民大会堂で周恩来総理の会見を受けた。この時同席した日中文化交流協会の事務局次長の村岡久平は次のように回想する。「その際、周総理はATTU結成を祝福し『これは一つの壮挙であり、アジア民族の団結の現れです。後藤鉀二先生に哀悼の意を表します。後藤先生はアジア卓球界とアジア民族の友好と団

結のため有益な貢献をされました」と述べられ、目をうるませて後藤夫人に会釈された光景は、同席した私は今でもはっきりとおぼえております。』²⁷⁾ 他方後藤一家と単独に会見した周恩来は、「後藤鉀二先生は中日友好と世界平和のため、大変な努力をなさり感謝しています。中国には『水を飲む時、井戸を掘った人のことを忘れない』という諺がありますが、中国人民はいつまでも後藤先生のことは忘れません。力を落とさず、先生の遺志をついで下さい。悲しみを力にかえて」²⁸⁾ と述べ、後藤の家族をとくに労った。

信念の人・後藤鉀二は卓球を通じ、中国と深い友誼を結んだ。同時にアジアおよび世界に平和をもたらす契機を提供した。民間人としての後藤のやり遂げた「壮挙」は、ちょうど衆議院議員の横山利秋が評したように、「外務省のお役人にはとてもできない仕事」²⁹⁾ である。後藤は文字通りの「凡人の衣をまとっていた偉大人」³⁰⁾ であった。

結び

「ピンポン外交」、はすでに見てきたように、後藤がその舞台を設定し自ら脇役を演じ、中米両国卓球選手という千両役者が主役を演じたのであった。その舞台の脚本は多分周恩来総理が書いたのであろう。ちなみに、1971年3月、周恩来総理は日本の藤山愛一郎元外相と会見した折、アメリカとの関係について「ある時点が来れば急転直下の劇的な改善が可能である」³¹⁾ と語っている。「ピンポン外交」が中国、日米両国の接近と友好のきっかけとなったことを考える時、彼が果たした歴史的役割は大きい。

2000年12月16日、名古屋キャッスルホテルで、「後藤鉀二先生を偲ぶ会」が盛大に行なわれた。私も卓球協会の関係で通訳として出席した。その時から私は、後藤鉀二という人物に対する認識を改めて深め、卓球を通じ中日の友好、世界の平和に大きな力を捧げた彼の業績に心を打たれた。特にその時に中国卓球協会会長・徐寅生のスピーチは今でも耳元に聞こえるような気がする。それは次のようなものであった。

尊敬するご来賓、友人の皆様

本日、私たちは中国卓球協会の代表として、比類なき崇敬の念を抱いてこの盛大な記念行事に参加し、中日友好のため世界卓球競技に素晴らしい貢献をされた後藤鉀二先生を偲ぶためにわざわざ日本にやって参りました。

後藤鉀二先生は著名なる社会活動家であり、アジア卓球連合の発起人でありました。先生は一生を通して中日友好の事業と世界卓球競技の発展のために努力された。特に卓球競技の交流を通してひとつまたひとつの友好の掛け橋をかけられ、皮膚の色も違い、民族も違う人達を一つに繋ぎ、政治的な偏見を捨て、言葉の壁を乗り越えて、共に人類の文明と進歩のため、ご自分の力を尽くされました。そして、この進歩的な活動の熱心な促進者である後藤鉀二先生は、全ての平和事業を愛する人々の心の中にも極めて高い声望を博し、人々の尊敬を受けられました。

中国卓球界と世界卓球界との交流が途絶えていた1971年、中国卓球が国際卓球界に復帰できるようにするため、時に第31回名古屋世界卓球選手権大会に中国卓球チームが参加する機会を捉えて、日中国交正常化を積極的に促進するため、後藤鉀二先生は自分の危険を顧みず、多くの人々には想像もできないほどの困難と圧力を克服して何度も中国を訪問

し、ついに中国卓球チームの試合参加を実現し、そして名古屋で「ピンポン外交」と世間で言われるあの重大な歴史的意義を有する出来事が生まれたのである。「小さなボールが大きな地球を動かし」国際政治の発展を促進させたのであります。中日両国は一衣帯水の隣邦であり、長い歴史を持っておりませんが、過去を忘れず、将来の戒めとしなければならないと思います。私達が今日こうして後藤鉦二先生お慰みになるのは、先生が終生追求した、人類の素晴らしい事業と願望を引き継ぎ、中日両国人民の世々代々の友好を保たんがためにほかなりません。間もなく新世紀に入ろうとしています、スポーツは人類文明活動の重要な構成要素として各国人民間の交流を促進し、理解を深め、友情を促進する条件にとりわけ恵まれています。後藤鉦二先生が生涯果たせなかった事業を完成させるべく共に努力する責任と義務があるものと考えます。後藤鉦二先生の精神が長く後世に残りますように。³²⁾

そのスピーチは、中国における後藤への高い評価を物語っている。1970年代に築き上げられた中日の友好関係を永続するために、後藤の精神は絶えず想起され、学ばなければならない。

注

- 1) 西園寺公一「ピンポン外交の生みの親」（後藤鉦二先生追想録刊行委員会編・刊『後藤鉦二先生追想録』、1975年刊、P99～101）。
- 2) ピンポンニスト金太郎「米中ピンポン外交30周年に寄せて」
<http://homepage2.nifty.com/46wtte-osk/supporter/06.htm> 2001年5月6日
- 3) 森武「ピンポン外交—71年名古屋世界大会を中心に—」（早稲田大学社会科学研究所編刊『社会科学討究』102号、1989年刊、P217参照）。
- 4) 「難問かかえる日卓協」（『朝日新聞』1970年12月20日）。
- 5) 西園寺「ピンポン外交の生みの親」（前掲、P100）。
- 6) 2003年8月23日に筆者が森武（早大名誉教授）氏に対し、東京都新宿区の西早稲田の同氏自宅において実施したヒヤリングの記録より。
- 7) 1971年2月11日付『毎日新聞』記事。
- 8) 張平平「他也在拚搏—記原アジア連盟名誉秘書長宋中」（『ピンポン世界』1985年3月号、P23）。
- 9) 森武先生の中国訪問時のメモ「中国訪問記録」（森武氏所蔵資料）。
- 10) 1971年2月11日付『毎日新聞』記事。
- 11) 同。
- 12) 同。
- 13) 銭江著・神崎勇夫訳『米中外交秘録』（1988年、東方書店）、P22。
- 14) 同、P24。
- 15) 1971年2月11日付『毎日新聞』所載。
- 16) 同。
- 17) 1971年2月2日付『中日新聞』記事。
- 18) 『日中文化交流』第165号（1971年3月刊）所載。
- 19) 蜂谷弘道「私の一番好きな男」（前掲『後藤鉦二先生追想録』所収、P154～158）。
- 20) 「世界一と対戦は悲願・日中のかけ橋へお役に」（1971年2月14日付『毎日新聞』所載）
- 21) 「後藤鉦二卓連会長が放った猛スマッシュ」（『サンデー毎日』1971年2月28日刊、所収）。
- 22) 「世界一と対戦は悲願・日中のかけ橋へお役に」（1971年2月14日付『毎日新聞』所収）。
- 23) 伊藤清次ほか七名「後藤分隊長殿」（前掲『後藤鉦二先生追想録』所収、P3～8）。
- 24) 同。
- 25) 1971年3月19日付『毎日新聞』記事。
- 26) 『名古屋電気学園広報』臨時号（1972年1月25日）。
- 27) 村岡久平「決断と実行の人」（前掲『後藤鉦二先生追想録』所収、P172～176）。

-
- 28) 後藤淳「北京の決断・周恩来首相と父」(『卓球人』第5号〔特集「偲・後藤鉦二」〕2000年11月30日)。
29) 横山利秋「世界の後藤に憶う」(前掲『後藤鉦二先生追想録』所収、P189~191)。
30) 奥村重雄「凡人の衣をまとっている偉大人」(前掲『後藤鉦二先生追想録』所収、P422~426)。
31) H・キッシンジャー『キッシンジャー秘録』3、(斉藤弥三郎他訳、小学館、1980年) P145。
32) 「後藤鉦二先生を偲ぶ会」(2000年12月16日ウエステインナゴヤキャッスルホテルで開催)での徐寅生氏のスピーチ。

